

北九州市立
文学館

友の会会報

第14号

2022年1月

特別企画展「詩の水脈 北九州 詩の100年」が北九州市立文学館で1月30日まで開かれています。北九州で100年以上にわたって紡がれてきた近代詩の変容と発展を伝える意欲的な試み。北九州の詩壇の中心的存在として1970年代から活動する詩人の鷹取美保子さんに、企画展の見どころや、企画展に登場する詩人たちとの思い出を伺いました。聞き手は文学館友の会理事で日本近現代詩研究家の大川内夏樹さん（九州共立大講師）です。

心に残る北九州の詩人たち

元「未来樹」同人 鷹取美保子さんに聞く



鷹取さん（右）と大川内さん

大川内 私は今回の企画に協力者として携わりましたが、特定の地域の詩人の活動にスポットを当てて、これだけの規模で展示する試みは非常に珍しいと思います。どうお感じになりましたか。
鷹取 北九州の詩の流れが、とても丁寧

企画展を詩壇復興のきっかけに

- 2面 まはら三桃さんに聞く
- 3面 「アートシネマ」報告
- 4面 友の会会員・役員名簿



志摩海夫
(1908-1993)

鷹取美保子 たかとりみほこ
1951年、北九州市八幡西区生まれ。志摩海夫の現代詩講座をきっかけに詩作を始め、「未来樹」に参加。2006年、「千年の家」で第42回福岡県詩人賞を受賞。詩集に『氷柱花』『血縁の野』『冬の柘榴』など。

寧にまとめられた企画展ですね。学芸員や協力者の方々のご苦労はいかほどであったかと思えます。北九州で最も早く1916年に刊行されたといわれる「びろろど」をはじめ、日ごろ目にする機会のない古い詩誌や詩集を見ることができ、先人の熱が伝わってきました。
大川内 鷹取さんが「未来樹」の同人として活動を始めたのは45年ほど前



岡田武雄
(1914-2007)

1970年代だそうですが、当時の北九州の詩壇はどんな状況だったのですか。
鷹取 中学生の頃から詩を書き始め、大学を卒業後に米留学から戻り、まもなく「未来樹」の同人になりました。同誌を主宰する志摩海夫さんが地元の公民館で開いていた詩の講座に参加したのがきっかけです。当時は新聞社のカルチャーセンターや公民館などで多くの講座が開かれており、多くの若手の詩人が育っていました。志摩さんと共に当時、北九州の詩壇をリードしていたのが岡田武雄さんです。お二人の協力者に、「海峡派」の森田定治さんや「たむたむ」の青木新六さんなどがおられ、どの詩誌も活気にあふれていました。
大川内 志摩さんは、戦前から北九州の詩壇を牽引してきた詩人ですね。「八幡船」「浪漫」「未来樹」等、多くの雑誌に関わり、北九州詩人協会会長も務めています。岡田さんも戦前に活動を始めていますが、途中しばらく詩から離れている時期がありました。しかし、1970年代に再び詩作を開始し、詩集『婦命伝承』や『念珠抄』で高い評価を得ました。

2面に続く

「文学館 明るくなりましたね」



八幡西区出身で「鉄のしぶきがはねる」など北九州市を舞台にした作品も多数発表している作家、まはら三桃（みと）さんが、2020年度・第53回北九州市市民文化奨励賞を受賞しました。

2017年4月から8月にかけて行われた北九州市立文学館展示リニューアル懇話会の構成員として文学館の展示リニューアルに関わったほか、創作ノートが文学館に常設展示されているなど、文学館にゆかりのあるまはらさんに、文学館のリニューアルや友の会について話を聞きました。

「文学館展示リニューアル懇話会は『文学が好き』というキーワードで集まったいろいろな立場の人と出会えましたし、文学館をより魅力的な場所にするために一緒に出した意見が成果につながると思うとワクワクしました。頑張っって何か意見を言いたいと思えるような居心地の良い会でした」とまはらさん。

リニューアル懇話会に参加 まはら三桃さん

懇話会から出た意見も反映されたリニューアル後の文学館の印象を尋ねると、「全体的に明るくなりましたね。俳句パズルなど子ども目線に立ったものがあつたことも嬉しかったです。その他にも音声ガイドなどに必要なサービスが届くようになったと感じます」とのこと。

また、「友の会は文学が好き、文学館が好きという方たちが多く集まっている場なので、自分たちが好きなことを楽しむことが一番だと思います。皆さんが楽しみながら活動することが、文学館のためにも子どもたちのためにもなるはずですよ」と、友の会の皆さんにもメッセージを寄せられました。（文責・植田詩生）

まはら三桃さんプロフィール

2005年講談社児童文学新人賞（佳作）をとり翌年デビュー。2011年『鉄のしぶきはねる』で坪田譲治文学賞、第4回JBBY賞を受賞。『奮闘するたすく』は2018年青少年読書感想文全国コンクールの課題図書。著書に「たまごを持つように」「思いはいのり、言葉はつばさ」「空は逃げない」「パパとセイラの177日間」「零から0へ」などがある。最新作「かがやき子ども病院トレジャーハンター」は1月下旬発行予定。

1面から続く

鷹取 志摩さんは、詩集は生涯に1、2冊代表作をまとめたものを出せばよいと考えておられました。岡田さんは、とんとん出版し、世に多く問うべきだと考えておられるようでした。志摩さんは、静かに自己を見つめ詩を書くというタイプの詩人でした。岡田さんは、全国、とりわけ中央の詩人たちと交流し、詩人も積極的に行動すべきだという考えをお持ちのようでした。

また岡田さんが、当時九州朝日放送の取締役として福岡に赴任してこられた犬塚堯さん（H氏賞、日本現代詩人賞受賞者）を北九州の詩人たちに紹介してくださり、講演会や勉強会を通して視野を広げる大きなきっかけになったことは、忘れることができません。

大川内 北九州の詩を考える上では、岡田芳彦さんの存在も大きいと思います。岡田さんは、戦前から春山行夫らが東京で発行していたモダニズム詩誌「新領土」等で活躍し、戦後は、小田雅彦さんや鶴岡高さんとともに、1945年11月に北九州で「鵬」を創刊し、全国的に注目を集めました。

鷹取 岡田芳彦さんは、私が知る限りでは、北九州の詩界とは一線を引いておられたようで、どの詩誌にも属しておられませんでした。私が直接親しくさせていただいたのは公民館の文章講座を通してでした。直接的に文を書く方法を学ぶと言うよりも、実践的にとんとん書いてみる方がよいとお考えのようでした。

言葉の表現と言うよりも、文を書く際の視点の据え方を教えていただきました。

志摩さんと岡田武雄さんに配慮されたか、直接的な指導は受けられませんでした。たがとても穏やかなお人柄であり、どこかシャイな雰囲気もお持ちで、何でも相談できる心の広い方でした。町でお見掛けしても、北九州の詩を牽引するということ大きな役割を果たされた方には見え、小柄で煙草が大好きな好々爺だとしか見えなかったかもしれません。

大川内 私は大学で近現代詩の授業をしています。今の若い人は中学、高校の授業で詩を学ぶ機会があまり多くないようです。触れたことのないモダニズムの詩を学生に読ませると、こんな詩があつたのかと驚いて期待以上に細かく読み込んでくれる学生もいます。詩を身近に感じてもらえる機会を増やす必要を感じます。

鷹取 北九州の詩誌が少なくなり、若い詩人が少なくなった現状に、私も心を痛めています。かつて詩は青春の文学と呼ばれていたものですが、難しさを感じて敬遠されてしまうのでしょうか。大川内さんとは一緒に、北九州市が主催する小中学生対象の「あなたにいたたくて生まれてきた詩コンクール」の審査員を務めています。応募者の中から一人でも二人でもよいから詩を書き続けてくれる子がいることを切に願ひながら選考しています。企画展が北九州の詩壇を盛り上げる、ひとつのきっかけになってくれればと思います。

（文責・伊藤和人）

一番人気は清張「砂の器」

東アジア文化都市北九州2020▼21

「アートシネマ」開催

10月2日から11月5日まで、北九州市ゆかりの作家の映画化作品を上映する「アートシネマ」映画で観る北九州の文学（東アジア文化都市北九州2020▼21事業・北九州市主催）が小倉昭和館で開催されました。長崎街道木屋瀬宿記念館で上映された伊馬春部作品を加えた21作品のうち12作品が、貴重なフィルムでの上映でした。



村田喜代子さん



福澤徹三さん

10月2日には原作者の村田喜代子さん、17日には福澤徹三さんによるトークショーを開催。また作品上映前には、田中慎弥さん、リリー・フランキーさん、タナダユキさんなどから届いたメッセージ動画も公開されました。

今回、学生は無料で鑑賞できるなど、若い方々に「アートシネマ」が映画体験、

村田喜代子さん、福澤徹三さんも来場

トークショーはいずれも小倉昭和館の樋口智巳館主が進行役になって開かれました。村田喜代子さんは、芥川賞受賞小説『鍋の中』が、黒澤明監督作品『八月の狂詩曲（ラブソディー）』の原作となりましたが、「黒澤明監督の映画と自分が書いたものを比べ合わせると何とも言いようがない」と話し始めました。

村田さん自身が小説の勉強を始めた頃は、メッセーシ性のないものが純文学だという傾向があったため、自分の文学には大きな話を持ち込まないようしていたのに対し、メッセーシ性を一生貫いた黒澤明監督が小説にはなかった「原子爆弾」を映画の中に入れたことで原作とは大きく内容が変わってしまうことに。

しかし、オルガンの音楽やバラをの

文学体験の扉を開きつつかけになり、この街に対するシビックプライドの醸成につながることへの期待を込めた企画でした。全作品をご覧になった方もおり、結果、2700人あまりの方々が、北九州の文学と映像芸術の美しい共鳴をスクリーンで体感しました。

一番人気は『砂の器』（251枚）以下、『日本侠客伝 花と龍』（161枚）、『復讐するは我にあり』（157枚）、『東京タワー オカンとボクと、時々、オトン』（146枚）と続きました。

※（ ）内は小倉昭和館でのチケット販売数（文責・樋口智巳）

ぼつていく蟻の姿など、小説の重要なシーンのほとんどは映画の中で使われています。それは村田さんが小説の中で提供した材料が監督の心を揺さぶったから。「これが文学の力」だと村田さんも断言していました。

現在、映画化が進んでいるのは読売文学賞受賞作の『ゆうじょこう』（新潮社）。熊本の遊郭にあった「遊女の学校」の話をも「人間のアイデンティティーに関する非常に重要な本である」と、「禁じられた歌声」でアカデミー賞外国映画賞にもノミネートされたフランスのアブデラマン・シサコ監督が映画化しようとしています。新型コロナの影響でいったん映画化の話はストップしていますが、コロナが収束し、再び動き出す日が楽しみです。

もう1人のゲストは「東京難民」原作者の福澤徹三さん。原作の単行本が出たのはネットカフェ難民やワーキングプア、ホームレスなどの問題が表面化してきた時期で、「勝ち組・負け組」という言葉がトレンドになっていた頃だったと言います。

大学を除籍された主人公が最終的にはホームレスへと転落していく様を描いた作品ですが、原作は上下巻とボリュームがあるため、主人公の転職数が映画よりもはるかに多く、後半の内容がかなり違うとのこと。原作・映画ともに最後にはかすかな救いがありますが、原作はパッドエンドにしたかったと裏話も飛び出しました。

また、最近の執筆活動についても語ってくれた福澤さん。2021年5月刊行の『そのひと皿にめぐりあうとき』（光文社）は、戦争で両親と住まいを失い、終戦直後の闇市で生きる17歳の少年と、コロナ禍で人生が狂わされていく2020年の高校生が主人公。戦禍とコロナ禍、それぞれの時代を舞台に、2つの物語が同時進行していきます。

一方、若い人向けに書いたという『作家ごはん』（講談社文庫）は、小説を書かずにお取り寄せばかりしている作家と、原稿がほしいのに晩酌に付き合わせてばかりの新人編集者を描くエンターテインメント・グルメ小説。ドラマや映画、コミックになりやすいものを書くのは、若い人に小説に親しんでもらいたいという思いもあると話してくれました。

（文責・植田詩生）